清宮宗親の事蹟とその旧蔵の陽明学関係資料

―王陽明銅像と三島中洲撰の王文成公銅像記、および清宮宗親字号説―

町　泉寿郎

はじめに

二〇二二年、明治期の漢学塾二松学舎に学んだ清宮宗親（せいみやむねちか）のご子孫から、三次にわたって本学にその旧蔵資料の寄贈を受けた。それらは清宮の長い中国生活を反映して、清末・中華民国・満州帝国の各時代各地域において清宮が交流した中国人から贈られた書画を数多く含んでおり、近代日中交流史上の貴重な資料群といえる。

清宮宗親は広くその名を知られた人物ではないが、幸い本誌一三号（二〇〇一年）に菊地誠一氏が「三島中洲の中国詩碑とその周辺事情」を発表していて、中国・貴州省の陽明祠に三島中洲の詩碑を建てた人物として、中洲門人の清宮宗親について言及している。その後、石田肇氏が「貴州省の日本人教習と陽明祠の三島中洲詩碑　附：三島中洲と黎庶昌」（『駒沢史学』六四号、二〇〇五年）において、明治三〇～四〇年代に中国各地で活動した日本人教習について概説し、清宮ら日本人教習が陽明洞を訪れた際にその壁面に刻した文字や陽明祠に展示されている三島中洲詩碑の拓本の写真を添えて紹介

している。更にこの詩碑をめぐっては、中国側でもいくつかの研究が発表されている。

また、一時期、清宮と貴陽で同僚であった漢学者岡山源六に関して、白井順氏が「西村天囚の門人・岡山源六―その中国貴陽時代を中心に―」（『懐徳』八七号、二〇一九年）を発表し、日露戦争最中に岡山源六が貴陽師範学校で惹き起こした学生殴辱事件などを中心に当時の状況を報告している。

寄贈いただいて以来、筆者は図書館から委嘱されてその整理作業に従事しており、随時その成果を公表していくつもりである。今回は整理作業の第一報として、清宮の旧蔵にかかる王陽明銅像と、これに三島中洲が寄せた像記および諸家が寄せた題跋を巻子本に装丁した一巻、三島中洲が撰文した清宮の字号説およびこれに諸家が寄せた題跋を巻子本に装丁した一巻を紹介・翻刻し、これらの資料の解題を兼ねて清宮の事蹟について従来の研究成果に若干の補足を試みるものである。

清宮宗親の事蹟

清宮宗親の事蹟に関しては、横須賀司久氏が本学図書館季報の連載をまとめた『漢詩人列伝』（五月書房、一九九七年）に「清宮黔城」が立項されており、当該文章は清宮の長女斎藤安子氏[1]から提供された資料に基づいているため、三頁余りの簡潔な記述ながら他に見えない記事が多い。また、漢学塾二松学舎の同窓会誌である『二松学友会誌』（一八九六～一九一九）や『中洲会誌』には、その彙報蘭にしばしば清宮の動向が記されており、横須賀氏の記述と併せて事蹟を知る材料となるので、上述の先行研究とこれらを参照してその事蹟を記しておこう。

清宮宗親（一八七六～一九三六）は、名は宗親、字は民卿、良斎と号し、後に貴州に奉職してからは貴州の一字称「黔」を用いて黔城と号した。民卿の字と良斎の号は、一八九六年（明治二九）に清宮が中洲に請うて「字号説」（後掲）とともに附与されたものである。茨城県鹿島郡夏海村（現在の鉾田市と大洗町の一部）の出身で、父和惣治は神山村（現大洗町）の菅谷兵八の二男に生まれ、清宮氏を継いだ。宗親は和惣治とつね夫婦の間の三男に生まれ、一八九三年（明治二六）に上京して二松学舎に入塾した。

清宮は三島中洲からの信頼が厚く、中洲が東宮侍講を拝命した一八九六年（明治二九）の七～九月に日光と塩原温泉に滞在中、清宮は老師を扶助して詩稿の整理にあたり、中洲からその功を「孔門の子夏」に比した詩を贈られた[2]。一八九七年（明治三〇）の夏季休暇後からは塾の会計係を勤めている。なお、同年六月六日には神田錦輝館において学友会春期修睦会を兼ねて二松学舎出身の陸軍軍人福島安正（一八五二～一九一九、当時は陸軍大佐・参謀本部編纂課長）の遠征帰朝歓迎会が開催されているから[3]、後に清宮がその知遇によって旅順や青島で関東軍の通訳官を務めることになる福島安正とはこの時既に面識を得ていた可能性が高い。更に一八九九（明治三二）、清宮は二松学舎の助教となり、一九〇〇年（明治三三）一月より赤坂第三連隊下士官に漢文を教授するようになった。

一九〇二年（明治三五）に、北京の京師大学堂総教習となった呉汝綸（一八四〇～一九〇三）が教育状況視察のために来日し（六月二八日東京到着、一〇月二二日帰国）、七月六日には三島中洲主催による歓迎会が二松学舎最寄りの西洋料理店・富士見軒で開かれ、二松学舎出身者二〇余名が参加した。呉汝綸が学問を講じた保定の蓮池書院には、二松学舎出身で外務省派遣留学生の野口多内（一八七六～一九四九、号三山）が学び、同じく二松学舎出身の小川運平（一八七七～一九三五、号柳坡、陸軍通訳）も呉汝綸と交流があったから、歓迎会はこれらの人物による事前情報によって設定されたと考えられる。しか

しこの歓迎会の記念写真[4]に清宮の姿はない。清宮は同年春に貴州省貴陽府から日本人教習として招聘されて赴任していたからである。清宮が渡清する際、三島中洲は次の送別詩を贈っている。

蛍雪十年学艸廬　雄飛一旦夙望舒　帰来待汝為吾語　未見江山未見書
明治壬寅春送清宮民卿遊清国　老師東宮侍講三島毅[5]

清宮が貴陽に赴任した時、同時期に赴任した同僚に木藤武彦があり、既に同年三月三日に着任していた上司に当たる高山公通（一八六七～一九四〇、この時陸軍少佐・総教習、後に中将）と金子新太郎[6]（一八六五～一九一一、このとき陸軍中尉・教習）がいた。貴陽到着から間もない一九〇二年（明治三五）七月の記念写真が残っている（**写真1**）。この時の写真には上記の日本人教習のほか、清国人としては戴永清（師範学堂書記長）と馬啓華（出迎員）が写っている。清宮と木藤が貴陽武備学堂と貴陽師範学堂に教習として正式に着任したのは同年一〇月三一日のことであるが、同月に撮った師範学堂における教習たちの写真一枚、教習と生徒の集合写真二枚（**写真2**）、武備学堂の教習と生徒との集合写真一枚が残っている。師範学堂での写真には、一〇月一七日に貴陽に到着した人類学者の鳥居龍蔵（一八七〇～一九五三、このとき東京帝大助手）が中国服姿で同席しているのも確認できる。

また、この年に清宮が交流をもった清人には、貴州知府の呉嘉瑞、貴州巡撫の李経義（一八五七～一九二五）、貴陽師範学堂を創設した楽嘉藻らがあったことが、彼らから贈られた書画によって知られる。なお、呉嘉瑞とは扶風山で開かれた会において面会にしているので、扶風山を訪れた清宮はこの時に陽明祠にも訪れている可能性が高い。

写真１
右から順に、木藤武彦、高山公通、清宮宗親、戴永清（接待員）、馬啓華（出迎員）、金子新太郎

写真２
貴陽師範学堂での教習と生徒の集合写真
中列（椅子に着座している者）右から順に、清宮宗親、鳥居龍蔵、高山公通、金子新太郎、木藤武彦

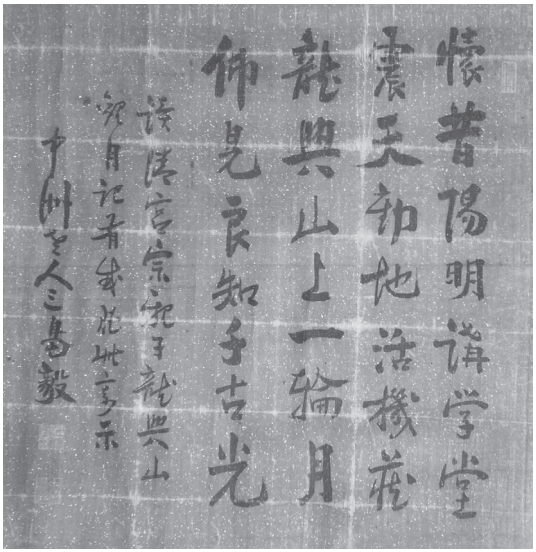

写真３
1903 年（明治 36）冬に貴陽で清宮宗親が受け取った三島中洲の七絶

一九〇三年（明治三六）には二月に雲南省に遊んで、雲貴総督の林紹年（一八四五～一九一六）や雲南学政の呉魯に会い、三月には貴州学政の趙惟熙と会い、それぞれ書の揮毫を請うた。また、林紹年の指示によって貴州大学堂から選抜されて日本留学することになる周恭寿（一八七六～一九五〇）ともこの時期に交流があった。

八月には、王守仁の陽明学大悟の地として知られる修文県龍岡山の陽明洞を高山公通・金子新太郎・岡山源六（一九〇三年着任の新任教習）と共に訪ねて、洞穴壁面に文字を刻した。この時に清宮は「龍岡山観月記」を作って三島中洲に書き送り、中洲がこれに応えて七絶「読清宮宗親龍岡山観月記有感」（**写真３**）を作って清宮に贈った。同年冬これを受け取った清宮は中洲の詩を刻した詩碑を建てることを思い立ち、あらためて中洲に建碑用の揮毫を請い、中洲は次のように揮毫した。

憶昔陽明講学堂　震天動地活機蔵　龍岡山上一輪月　仰見良知千古光

明治癸卯歳、門人清宮宗親従高山金子両武官訪貴州陽明洞、遂登龍岡山観月有記寄示、余因賦此詩。頃両武官与宗親等謀欲刻之石以建洞中、遠問余。一詩雖甚悪、亦足以表海外景仰之意、則不辞書此以贈。　大日本国東宮侍講文学博士三島毅

一九〇四年（明治三七）に清宮は師範学堂の創設者のひとりである于徳楷と謀り、陽明洞では場所が不便なことを考慮して、扶風山の陽明祠の傍らに建碑することとなった。当該碑文には中洲の詩に続いて、建碑場所を変更する理由を記した跋が建碑者七名（高山公通、金子新太郎、愛甲猪之助、岡山源六、木藤武彦、岩原大三郎と清宮宗親）の名と共に刻されている。しかし高山総教習は日露開戦によって同年二月すでに貴陽を去っており、その後は金子中尉が総教習代理となっていた。

同碑が建てられた九月、師範学堂では事件が起こった。遼陽会戦の日本軍勝利に狂喜した岡山源六が酒に酔って学生たちを殴り、数日後に解雇されたのである。清宮はこの時に同席していたが、暴力には関与していなかったため、罪に問われなかった。

この年、清宮は李端棻（一八三三～一九〇七、号苾園）と交わり、書の揮毫を請うている。李端棻は北京・京師大学堂の開設を提言した人物で、この頃は郷里貴陽に戻って経世学堂に講学していた。

清宮が岩原大三郎と共に日本人教習の任を終えて貴陽を離れたのは、一九〇八年（明治四一）三月のことであり、一九〇二年（明治三五）春に日本を離れて以来、六年間の貴陽滞在であった。帰国に当たり柯邵忞（一八五〇～一九三三）、余誠格（一八五六～一九二六）、呉嘉瑞、厳雋熙、于徳楷、李翰芬、倪惟欽らから送別の詩文を贈られている。なお後述する王

写真４
1910 年（明治 43）3 月 28 日、鴨緑江畔安東県における二松学舎同窓会の時の写真
上列右から大山格司、久山順平、野口多内。下列右から高橋止観、清宮宗親、稲川容道。

文成公銅像は前年一九〇七年（明治四〇）七月に清宮が購入したものであり、帰国に当たって貴州から日本に持ち帰ったものである。

一九〇八～一九〇九年（明治四一～四二）の時期、清宮は東京神田区宮本町一に居を構え、久しぶりの日本滞在となった。しかし、前述した同年・同学の野口多内が安東領事館の勤務を最後に外務省通訳官を退官して「満鮮日報」等を創業したのを受けて、翌年（明治四三）には満州に渡り安東県下大東溝の日中合弁による鴨緑江採木公司に勤務することとなった。当時、安東県には野口をはじめ大山格司・久山順平・高橋止観・稲川容道ら数人の二松学舎同学が住んでおり、三月二八日には同地在住の二松学舎卒業生が同窓会を開いている（**写真４**）。また、この前後の時期に清宮は旧水戸藩士武熊氏の女を娶り、一九一二年（明治四五）二月に長女安子（中洲の命名にかかる）が出生している（住所は安東県大和橋通七―四）。

同年一一月に一旦帰国し、翌年（大正二）五月に再び渡

満して、旅順の関東庁都督府に通訳官として勤務した（住所は旅順新市街日進町一―一一）。これは前年四月に福島安正（男爵・中将）が関東庁都督府の都督（長官）に就任したことにともなう人事とされる。更に一九一五年（大正四）には青島守備軍司令部に転属となった。清宮旧蔵資料の中には、同年初夏に司令官神尾光臣（一八五五～一九二七）が揮毫した書も残されている。一九一七年（大正六）には中華民国政府から通訳官としての勤務に対して六等嘉禾章を、一九二二年（大正一一）には五等嘉禾章を贈られている。

なお、この頃時期未詳ながら、宮崎滔天（一八七一～一九二二）、余維謙（一八八二～？）、張群（一八八九～一九九〇）、戴季陶（一八九一～一九四九、号天仇）、余程萬（一九〇二～一九五五）ら孫文に近い人々とも交流があったらしく、その寄せ書きも残されている。

一九一九年（大正八）に関東都督府が関東軍と関東庁に改組された後、清宮は一九二三年（大正一二）に関東軍参謀部附となって北京に転任したらしく、ここで貴州時代の旧知との再会があった。同年には議員として国会に出席した周恭寿に二〇数年ぶりに再会。一九二六年（大正一五）には楽嘉藻と再会し、楽嘉藻は一九〇二年に貴陽で清宮と会った時に詠じた詩句を揮毫した。他にこの時期、劉文龍、陳筑山、毛邦偉、符詩楷等とも交流を持っている。

この時期以降、満州建国までの一〇年足らずは、近代中国史の推移が複雑化し、かつ二松学舎は専門学校設立にともないその機関誌が性格を変えて同窓生に関する資料が乏しくなるため、清宮の動向を正確に叙述することは難しい。ここでは残された資料に従って略述するにとどめたい。

北伐により北京政府が崩壊した一九二八年（昭和三）以降、清宮は天津や遼東半島に滞在することが多かったらしく、この時期に交流をもった中国人の書画もまとまって残されている。一九二八～一九三〇年にかけて作られた書画帖『萬花

縁』の中には、曽毓雋（一八七五～一九五七）、呉光新（一八八一～一九三九）、張国淦（一八七一～一九五九）、張弧（一八七五～一九三九）、孫伝芳（一八八五～一九三五）、閻錫山（一八八三～一九六〇）、宝熙（一八七一～一九四二）、鄒魯（一八八五～一九五四）、謝介石（一八七八～一九五四）等の書画が収められている。

一九二九年（昭和四）に、清宮はかつて三島中洲から与えられた「王文成公銅像記」（一九一四年一一月撰）と「字号説」（一八九六年九月撰）を、この時期に瀋陽（奉天）に移ってきた中国の著名な学者や要人たちに示して題跋を求めている。先ず一月には野口多内の仲介によって、袁金鎧（一八七〇～一九四七、字潔珊、東北政務委員会委員）が双方に二つの題記を撰文し、更に「字号説」を巻子本に装丁した後で納める木箱の題字も揮毫した。次いで羅振玉（一八六六～一九四〇、号雪堂）が二つの題記を撰文した。八月には王樹枏（一八五二～一九三六、号陶廬）が二つの題記を撰文した。九月には呉廷燮が二つの題記を撰文した。一〇月には呉闓生（一八七七～一九四九、呉汝綸の子）が二つの題記を撰文した。

一九三〇年（昭和五）夏には、大連の星浦に住んでいた恭親王（一八八〇～一九三六、愛新覚羅溥偉）が右の二文にそれぞれ題記を撰文している。後掲するように、二巻の巻子本に装丁された三島中洲撰「王文成公銅像記」「字号説」では、いずれも中洲の文に先だって、最も地位の高い恭親王による題記が巻頭に置かれている。

一九三一年（昭和六）には、満州事変の直前に清宮は書画帖『翰墨因縁』を作っており、恭親王（一八九八～一九三六）、潘復（一八八三～一九三六）、李経方（一八五五～一九三四）、李思浩（一八八二～一九六八）、呉郁生等の書画を収めている。六月には、書画帖の表紙の題簽を劉希淹（一九〇六～一九三八、劉廷琛の三男）が揮毫している。

また同年、三島中洲撰「王文成公銅像記」「字号説」を諸家に示して更に題跋を求めおり、一九三一年六月には呉郁生が二つの題記を撰文した。同年夏には王垿（一八五七～一九三三）が青島で二つの題詩を撰んだ。前述の書画帖と同様、六

月に二巻の題簽を劉希淹が揮毫している。

一九三二年（昭和七＝大同元）一一月には陳宝琛（一八四八～一九三五）が前者に題詩を、後者に題記を撰文した。一九三三年（昭和八＝大同二）二月には宝熙（一八七一～一九四二）が前者に題記を撰文した。一九三五年（昭和一〇＝康徳二）三月には胡嗣瑗（一八六九～一九四九）が前者に題詞を撰んだ。同年六月には鄭孝胥（一八六〇～一九三八）が二つの題記を撰文した。一九三六年（昭和一一＝康徳三）には後者に対して、春に商衍瀛（一八七一～一九六〇）が題記を撰文し、三月には陳曽寿が題記を撰文した。

この間に満州国が建国（一九三二年）されると清宮は宮内府に翻訳官として勤務し、更に一九三五年（昭和一〇＝康徳二）には帝室大典委員会嘱託、宮内府一等翻訳官となった。だが同年に胃癌を患って一旦帰国して加療を余儀なくされる。『中洲会誌』哀悼欄の記事には「稍癒て奮つて復職」したと記されているが、一九三六年（昭和一一＝康徳三）二月二四日に再び満州に渡り[7]、一か月後の三月二五日に新京（現長春）の満鉄病院に六一歳で歿した。このことから、無理を押しての渡満であったと考えられる。三月二六日に薦任一等に昇叙され、翌二七日に勲三位・景雲章を追贈されている[8]。同二九日の告別式には、同学で同じく満州帝国官吏の佐藤知恭（一八七七～一九四四、号瞻斎）らが出席した。後に水戸の祇園寺に葬られ、法諡は大通院知学宗親居士。宗親と妻武熊氏の間には四男三女が生まれている。翌一九三七年（昭和一二）三月一四日に二松学舎において同じく前年に歿した同窓の富田健助（高知高等学校教授）・山田謙吉（号岳陽、上海・東亜同文書院教授）とともに清宮の追悼会が開催された。清宮の遺族として二男で当時陸軍士官学校に在学中の武熊宗武が出席している。その後、長男宗賢（京都帝大卒）と二男宗武は共に戦死しており、現在、清宮家の墓や宗親の遺品は宗親の四男宗忠氏（二〇〇五年歿）のご子孫が管理しておられる。なお、祇園寺の墓は武熊家の水戸の共有墓地に移されて墓誌のみが存するとの

ことである。

以上、清宮の事蹟によって明らかになったことは、清宮が一九〇〇年に二五歳で赤坂第三連隊の下士官に漢文を教授して以来、満州帝国宮内府の通訳官として六一歳で歿するまで、三六年に亙る大半の時間を中国大陸で過ごしたこと。その中国生活は、民間に身を置いた時期もあったが、その多くは日本陸軍と関わりが深く、早くから二松学舎の先輩である福島安正の知遇を得ていたことをはじめとして、貴陽の教習時代の上司である高山公通・金子新太郎等のような情報将校と活動を共にしていたのである。明治前期の二松学舎に学んだ人々からは多くの陸軍軍人が輩出したことが知られているが、軍人ではないけれども中国において日本陸軍と活動した清宮のような中国通は漢学塾時代の二松学舎出身者の一つの典型であったと言えるだろう。

三島中洲が清宮に与えた「王文成公銅像記」と「字号説」は、先に書かれた後者が王陽明の説く「良知」を清宮の一族のみならず広く天下国家に推し広めることを期待する内容である。清宮が教習生活を終えて更に中国での活動を継続していた時期に書かれた前者は、「良知」を推し広める際に内修・外修の内外兼修を説く内容であり、活動の場を広げていく門人に対して期待する点において前後照応する内容になっている。

これを中洲から贈られた清宮は、贈られて一五年以上が経過した時点を起点として、上述したように一九二九～一九三六年という満州国建国の前後にあたる時期にこれを中国の学者・要人たちに示して熱心に題跋を求めた。最も遅い時期に書かれた商衍瀛と陳曽寿の題記は実に清宮の病死直前のものであり、この二巻に清宮の強い思いが込められていたことを感じさせる。このことから見て、中洲から贈られた陽明学の「致良知」を骨子とする二文が清宮の生涯をかけた中国にお

ける活動の支えとなったことは確かであり、更に言えば日中両国人の協力による満州国の確立こそが清宮にとって「致良知」の極点、理想の実現であると考えたのではないかと思う。これは悲劇的な「同床異夢」としか言いようがないが、清宮のような漢学塾出身の中国通にとって、こうした思考はありがちのものであったかもしれない。

中国の学者たちが撰文した題跋について言えば、羅振玉（Ⅰ―⑤）と王樹枏（Ⅱ―⑥）が共に明治維新の成功に陽明学の影響があったことに言及している点が注目される。羅振玉はかつてこの問題について日本に教育視察を行った呉汝綸と語り合ったことがあると記している。王樹枏は程朱学と陸王学では相違点があっても修己治人・躬行実践の点では同じであり、明治維新期の陽明学者と同様に、清末の同治・咸豊期には程朱学から諸賢が輩出したと記し、程朱学・陸王学に優劣はないとする。陽明学が衰退して久しい二〇世紀初頭の中国の学者にとって、陽明学に対する関心は陽明学そのものではなく、陽明学が日本の明治維新の原動力になったとする見方にあったことが窺われる。また、この文章を撰文している三島中洲が現に天皇の侍講の立場にあることと、中国で長年にわたって活動を続ける清宮が三島中洲と陽明学によって師弟関係で結ばれているという事実は、彼らに日本における陽明学が必ずしも過去のものではないことを感じ取らせるに十分だったであろう。

（翻刻）

Ⅰ　王陽明銅像、および三島中洲撰「王文成公銅像記」と諸家題跋

王陽明銅像（写真5）（H二二・〇糎×W一三・五糎×D九・五、重さ一六五五瓦）

右手を膝に置き、左手に書物と見られるものを持つ。面相は頬骨高く、口髭と顎鬚を長く伸ばしている。官服ではなく、道服・道帽子を着用した姿。

附属物

台坐（木製、重さ九〇五瓦、台座に設置した像、H二七．〇糎）

箱（唐木製、H二六．五糎×W一六．二糎×D一二．〇糎）

箱の蓋に「陽明先生像　清宮宗親／明治四十年七月在大清國貴州購之」の刻字あり。

三島中洲撰「王文成公銅像記」一巻（H四六．五糎×W九七〇糎）

外題「三島博士王文成公銅象記　良齋先生囑題／叔文劉希淹辛未六月也　淹　文叔」（H三三．〇糎×W一．九糎）

①　恭親王の題記（用箋紙本H三九．八糎×W八四．八）

（印記）「御賜忠貞堅良」

写真５

王文成公銅像、および函の蓋に刻された「陽明先生像　清宮宗親　明治四十年七月在大清國貴州購之」の文字

我愛新覺羅之起於東北也、性誠俗朴、不務名、不自矜、醇如也。入關後、漸染侈靡之習致、有水弱之懼。鄰邦日本國、尊君敬老、尚武愛群、有足多者。古人有言曰、東方多君子之國、其信然乎。歐風東漸、時異勢殊、以中原五千年道德文化之鄉、竟倡無父無君之説、惑世誣民亂且未艾。而予今日竟能遇此卷於金州之海濱。嗚呼文成良知之學衰矣。中洲先生不可得而見矣、得讀其文而友其弟子亦幸矣。清宮君守明師之訓、充良知之心、是亦中洲先生矣猶自幸天德王道、仍厚育於東北之維、展閲既竟爲之惘然者久之。

宣統庚午夏（昭和五年＝一九三〇）、恭親王題。（印記）「和碩恭親王寶」「錫晉齋印」

② 三島中洲の像記（用箋絹本 H三九・八糎×一四一・一糎）

王文成公銅像記（印記）「中洲」

明治戊申（四一年＝一九〇八年）春、門人清宮民卿、自清國貴州齎一銅像歸、示曰、貴州有劉海帆者、遠祖三五在王文成公門。公亡後、門人胥謀鑄公銅像若干、相分以寓追慕之意。三五亦藏其一。子孫覇官貴州、遂土着、傳至海帆。弟曾受王學於先生、景慕文成久矣、遂購求。請先生記之。余薫沐拜觀、則高尺許、左手捧書卷、右手垂至膝。眼光注書、威容儼然、神采躍如、不覺起敬者久之。既數年、民卿懇促不已、乃謂之曰、子亦記公語乎。公曾曰、胸中有聖人、蓋謂良知也。良知無聖凡、存則聖、亡則凡。子苟存良知、良知昭然、萬理出、天下何事不可處。則子胸中常有聖人、又有文成矣、何必尊奉此銅像。雖然、學者有内修外修。心存養良知、内修也。就經史模範聖賢言行以自省察、外修也。内外兼修、洞然一致、則眞聖人、又眞文成矣。今公手書卷、豈非胸中卷中聖人相照洞然一致之時乎。然則子之尊奉銅像、亦資外修也。子能存奉胸中文成、更崇拜銅像模範其言行、内外洞然一致、則可謂能學文成者矣。文成有知必將曰、孺子可教。子學自此進矣。乃書以爲

記。

大正三年（一九一四）甲寅十一月、八十五翁中洲三島毅撰。（印記）「三島毅印」「字遠叔」

③陳寶琛の題詩（用箋絹本 H四六・〇糎×W一三・八糎）

謫宦龍場講學年　鑄金黔徼衍薪傳　不圖私淑瀛洲客　載上歸舟至日邊
儒術能爲耆定功　泱泱表海見雄風　服膺師訓尊心學　不獨文同理亦同

姚江之學、歷數百年而昌於海東。清宮良齋遊黔八年、得文成銅像而奉以歸。其師中洲先生爲之記、裝卷徵題。與予遇於長春、出以相眎。予少先生十八歲、而獲觀遺墨、如接謦欬、亦年八十有五矣。爰泚筆其左以志忻慕。

壬申（昭和七年＝一九三二）十一月朔、閩陳寶琛。（印記）「陳寶琛印」「弢庵八十後作」

④袁金鎧の題記（用箋紙本④⑤⑥⑦⑧一紙、H四三・〇糎×W一三一・〇糎）

三島先生篤好陽明之學、觀所題銅像記、推闡盡致、表裏洞然、有觸處豁朗境界、書法尤高古、無些子塵障繞其筆端、尤可寶也。

己巳（昭和四年＝一九二九）孟春元宵後三日、潔珊袁金鎧識。（印記）「袁金鎧印」「潔珊」

⑤羅振玉の題記

光緒丁酉（一三三年＝明治三〇年＝一八九七年）、予寓居滬江、始與東邦學者締交、知吾鄉陽明先生之學盛行于海東。每覽明治

中興史、知當日所以致隆盛者、固師武臣力所致、實以幕府崇尚儒術爲之基、德川氏之奉還大政、蓋凛然于春秋大義、遂使尊攘諸臣竟其功、此陽明良知之説收其効也。往歳曾與老友呉摯甫京卿言之。摯老東游、拜德川氏家廟、爲長歌以詠歎之。及辛亥後、予避地扶桑、故父耆舊每雖服膺儒術者尚不少、然後生多震驚于西洋物質文明、儒學亦稍々衰矣。今讀三島先生此記、深以内外交修望之清宮先生。復爲字號説、以親民之旨相敦勉。清宮先生必當能本諸師説、以先知先覺自任、俾以良知之説警當世、以復崇儒之舊。豈非其功將與明治維新諸臣比烈矣。謹企足以望之。

己巳（昭和四年＝一九二九）、貞松羅振玉拜觀竝題記。（印記）「臣玉之印」「叔言」

⑥王樹枏の題記

方王文成公謫官龍場、瘴癘困阨、幾瀕於死。逮其撫南贛征西粤、戡難綏邊、勲業烏奕、若是。然公生平良知之學、實得力於謫居黔中時、而黔之文化惟公牖之、動心忍性之功與濟世利物之志、蓋險夷若壹節焉、宜黔人至今尸祝不忘也。日本清宮良齋先生游黔、奉公銅像以歸、而請其師三島中洲侍講爲之記。先生師弟皆服膺文成力行而不惑者、乃距公歿且數百年、竟獲展奉遺像於瀛海風濤萬里以外。豈公在天之靈爽實式憑之耶、抑心源遙接有曠世而放感者耶。及觀中洲題記、以内外交修勖良齋、謂不在公像之有與無。嗚呼其所見蓋倜乎遠矣。

己巳（昭和四年＝一九二九）八月、陶廬老人王樹枏識於遼瀋、時年七十有九。（印記）「新城王氏樹枏」「陶廬七十後作」

⑦呉廷燮の題記

明天順中、以銅範飾金孔子竝四配像一龕、置于[10]文淵閣中間、示崇政本典至隆已。文成以忤璫謫龍場、當其時生死不自知、

豈意後人之鑄爲像以昭其不朽。今清宮先生得而寶之。是志文成之志、而必有以大光孔教也。

己巳（昭和四年＝一九二九）季秋、呉廷燮題。（印記）「呉廷燮印」「向之」

⑧呉闓生の題記

陽明先生學問事功震鑠一代、日本得之以強其國。吾國得此大賢不自崇、奉坐視其學、發揚光大於鄰邦、爲媿奚如。清宮先生持此冊屬題、瞻仰之餘、其頼有泚矣。

先公往年在東京、與三島侍講遊讌極歡、惟幷無遊德川家廟及作長歌之事。羅君舛蘊所言殆是誤記。附志以存事實。

己巳（昭和四年＝一九二九）初冬、桐城呉闓生記於遼東萃升書院講室。（印記）「呉闓生印」「北江」

⑨呉郁生の題記（用箋紙本⑨⑩⑪一紙、H三九．五糎×一二六．八糎）

（印記）「御賜景星照堂」

佛法有頓漸。尼山之言、博文約禮、下學上達而已、無頓悟之法。紫陽宗守之、故尊德性道問學竝進。金谿偏重尊性、陽明近之、提出良知二字爲教旨、近乎直指人心不立文字、殊塗同歸其理一也。當世之横流、人心陷溺驟語、以格致誠正格乎不入、則直揭其固有之良或可。憬然一悟、此在吾國亦捄時之一道也。良齋君本中洲先生之教、碻乎有得於心。余敬而愛之、坿識數語奉正。　時在辛未（昭和六年＝一九三一）六月、鈍齋呉郁生。（印記）「鈍齋」

⑩王**堺**の題詩

良齋好古慕前賢　私淑陽明已有年　行過五溪瞻回像　歩趨三島接心傳
淵源師友情何摯　香火因緣意倍虔　學術紛厖誰得挽　願君隨地廣眞詮
良齋先生雅正、辛未（昭和六年＝一九三一）夏、王**埒**題。（印記）「萊陽王**埒**別號寄叟」「我生之初咸豐戊午」

⑪　寶熙の題記

陽明學主知行合一。讀先生語錄云、以此純乎天理之心、發之事父便是孝、發之事君便是忠、發之交友治民便是信與仁。又曰知是行之始、行是知之成。此即中洲先生内外修之原也。清宮先生受學於中洲、服膺姚江拳々弗失。其於内外之際、固已深造、自得無少疑惑。展觀斯記、知其淵源有自來矣。
大同癸酉（二二年＝昭和八年＝一九三三）仲春　長白寶熙題。（印記）「臣熙之印」

⑫　胡嗣瑗の題詞（用箋紙本⑫⑬一紙、H四五．六糎×W一三三．二糎）

是康陵輕倒太阿時、先生謫龍城、便崎嶇瘴國、儒冠非誤、獨破天荒、自古無文卉服、羅拜列門墻、俎豆千秋事、金鑄何妨。
我信神遊八表、況薪傳不盡、東暨扶桑、想驂鸞來去、山玉水環鄉、試回頭、兒時瞻詠、早不堪、剪伐到甘棠、今垂老、愧蓬壺侶、遙爇心香。
八聲甘州
清宮良齋爲中洲博士入室弟子、受姚江之學、光緒中來游我黔、爲學校講師歴八年。所獲王文成公銅範遺象歸、求其師爲之記。柳邊相見眎、余讀之、追往惜今、漫成此解。

康德二年（昭和九年＝一九三四）三月、開州胡嗣瑗。（印記）「臣嗣瑗印」「未死深疑負國恩」

⑬　鄭孝胥の題記

孟子所謂良能良知者、即性善之旨、世亂之極、乃以縱欲貪利爲良知良能矣。宗陽明者、何以救之。乙亥（昭和一〇年＝一九三五）六月、書請良齋先生教正、孝胥。（印記）「夜起庵叟」

Ⅱ　三島中洲撰「字号説」、および諸家題跋

三島中洲撰「清宮宗親字号説」一巻（H三九・〇糎×W九三一糎）

外題「三島侍講清宮字号説　辛未六月　叔文劉希淹題　淹　文叔」（H二五・四糎×W二・〇糎）

①　恭親王の題記（用箋紙本 H三三・八糎×W八四・七糎）

（印記）「御賜忠賢堅卓」

治世之道備在五經、而良知之説盛於陽明、實務本探源之論、而知其道者鮮矣。況今二十年來邪説詖辭充汴宇内、戕仁義喪廉恥、青年之人殆不知道義氣節爲何物、擧世滔々幾陷於禽獸之域矣。今何幸處海濱之僻、遇東國之人、乃以此卷屬予題識哉。卷爲舊友清宮良齋先生所有、是其師三島中洲先生所作字號記也。諷誦數回、憮然以難。試觀莽々中原、保良知之德充良知之用者、今幾人乎。然猶幸王道之未盡絶、尚有崇奉講論、如其師若弟者、是不禁威鳳晨星之感、而益傷知道者之鮮矣。

用寫數語題而歸之。良齋其保之哉。

宣統庚午（昭和五年＝一九三〇）夏至日、題於星浦山莊。恭親王幷識。（印記）「錫晉齋印」「恭親王」

② 三島中洲の字号説（用箋 絹本 H三二・八糎×W九八・八糎）

字號説（印記）「黄薇人」

丙申（明治二九年＝一八九六）秋、余挈門生清宮宗親遊浴于鹽原温泉。一日宗親問其字號。余曰、宗族固可親、次之不可不親衆民。取之古本大學親民、請字曰民卿。而親民之本在明々德、明德即良知也、請號曰良齋。因顧鹽溪曰、此地噴靈泉治百疾、又奇巖名瀑以療騷人墨客烟霞疾。巨石大木以供建築之用、姫魚石斑魚以供割烹之具。豈非山水自然之良知哉。然往古人不知之、委棄於空山絶谷之間、猶人不知己有良知、自暴自棄者。近時世人稍知之、來遊者不絶迹、亦猶少發良知之能明德之光、然不過關東一方、余惜未擴充之天下也。子猶年少學淺、雖知良知之德、僅用之宗族、而不知擴充之家國天下。子其勉旃。遂書以爲説。

東宮侍講三島毅撰。（印記）「三島毅字遠叔」「中洲漁顧」

③ 陳寶琛の題記（用箋 絹本 H三八・八糎×W一三・七糎）

（印記）「瓊林入瑞」

孟子言良知、以親々爲仁。達之天下、寔姚江之學所自昉。清宮君受王學於中洲先生、以其名宗親也、則取古本大學親民、字之曰民卿、而即號爲良齋。其淵源眞確、期許遠大學、於所爲説見之。君於三十年前、嘗遊吾閩、未獲一晤。今乃邂逅新

京、出兩卷屬題。既爲著其師弟授受之由、又有感於文字因緣之非淺矣。
壬申（昭和七年＝一九三二）仲冬、陳寶琛。（印記）「陳寶琛印」「弢庵八十後作」

④　袁金鎧の題記（用箋紙本④⑤⑥⑦⑧一紙、H三五．九糎×W一二九．八糎）

己巳（昭和四年＝一九二九）正月十八日、野口君持清宮先生所藏三島侍講字號説。本陽明之學、爲勗勉之意。文詞清古、書法高老、洵可寶貴。敬題數語歸之。　潔珊袁金鎧。（印記）「袁金鎧印」「潔珊」

⑤　羅振玉の題記

戊辰（昭和三年＝一九二八）仲冬予避地遼東、明年春始識清宮先生、挹其氣充然儒者心焉敬之、三數見乃知曾從三島中洲先生受陽明學。因出此卷屬題。文中以大學明德親民之旨相勗、知清宮先生所以持身立行之本源蓋有在也。方今東方大陸邪説横行、甚于洪猛。惟扶桑三島尚能維持三千年之綱常名教、豈崇儒之効耶。謹書卷尾以識欽企。
貞松羅振玉。[11]（印記）「羅振玉印」「文學侍從」

⑥　王樹枏の跋

昔昌黎韓子謂、孔子之道大而能博、門弟子不能徧觀而盡識也。故學焉而皆得其性之所近、後世程朱陸王立説攸殊、雖沈潛高明根於性之各有不同、至若修己治人躬行實踐、期無悖乎聖人之恉、其揆一也。日本明治維新、諸賢多屬姚江學派、而我國有清咸同之際、如曾文正・羅忠節諸公芟夷禍難、厥功出於講學、又多奉程朱爲依歸、其明効大驗如此。晩近人心陷溺異

説遙起、欲盡擧吾國數千年來民彝物則之理摧滅無遺。於是泯々棼々莫可究詰、夫同一變法也、或以之躋盛強、或繇之益衰且亂、豈非學術陵夷之故哉。今觀日本清宮良齋出眎其師三島中洲侍講字號説、始知先生師若弟服膺姚江學説沆瀣一氣。以良齋名宗親、故字之曰民卿、取大學明德親民之義。又謂明德即致良知、故號之曰良齋。其言原本經術、用意至深且遠。吾於是益歎、世之亂也、胥由德之不明民之不親、推其原、實始於良知汨没馴致放僻邪侈無所不爲。使人々能反躬自省、知萬物皆備於我、由一己以推薦諸家國天下、則郅治何難。吾既嘉良齋能篤守師説、爲東鄰士大夫所矜式、而又悲吾國當存亡絶續之交、安得有明道勵學如先生師若弟、其人者而一振起之乎。

己巳（昭和四年＝一九二九）八月既望、新城王樹枏跋。岩年七十有九。（印記）「王樹枏印」「晉卿」

⑦　呉廷燮の題記

巍々姚江　先民知覺　治亂持危　勲業卓犖　我景清宮　篤耆厥學　服膺拳々　四國矩矱

己巳（昭和四年＝一九二九）季秋、呉廷燮題。（印記）「呉廷燮印」「向之」

⑧　呉闓生の題記

闓生往年從先公至東京、三島侍講率其門下能文之士數十人結會歡迎、侍講與先公遊讌極歡、闓生亦蒙眷待、今忽々三十年。清宮先生出示此冊屬題。睠念前蹤、泫然不知涕之落也。

桐城呉闓生識。（印記）「呉闓生印」「北江」

⑨　呉郁生の題記（⑨⑩一紙、H三四．〇糎×W一二八．〇糎）

（印記）「御賜景星照堂」

中洲先生宗陽明之爲學、爲東國大師。良齋君親承罄欵、奉杖從遊。讀此記、彷彿學沂風雩[12]胸次、洒然之氣象也、曷勝企仰。古人云、瞬有存息有養。良齋於此殆目擊而道存乎。

時辛未（昭和六年＝一九三一）夏六月、鈍叟呉郁生。（印記）「鈍齋」

⑩　王㦳の題詩

人生秉至性　所好在懿德　尼山決其奥　姚江悟其極　卓哉三島君　寢饋姚江學
本之以教授　語語皆精確　清宮列門墻　弟子之高足　篤信王文成　蓄志願私淑
因名而請字　用以作模楷　既字曰民卿　復號以良齋　姚江揭良知　績學富事功
究其所心得　只在孝與忠　良能本良知　初不待外求　清宮守師訓　拳々而服膺
我讀三島字號説、環顧中邦感不勝。
清宮良齋先生雅屬、辛未（昭和六年＝一九三一）六月、萊陽王㦳題於青島。（印記）「㦳印」「姑光東人」

⑪　鄭孝胥の題記（用箋紙本⑪⑫⑬一紙、H三八．八糎×W九四．〇糎）

孔孟所言、皆人己之學。陽明以良知立説、孟子謂良能良知、必證之愛親敬兄推仁義以達天下。後世儒者務言心性遂入禪學、恐非孔孟之本旨也。　清宮良齋先生之屬、孝胥。（印記）「夜起庵叟」

⑫　商衍瀛の題記

良知是人心本體、猶水之源木之本、千流萬派分枝布葉、皆從此出。大學由明德而親民、先誠正而后平治、此姚江知行合一之説也。良齋先生、出其師三島侍講名字説、屬題。侍講期於良齋者大、而良齋之自任亦匪輕。當此道德淪喪之時、欲挽横流、當從人自見本心始、則此卷實救時之道師也。

康德三年（昭和一一年＝一九三六）丙子春分日、商衍瀛題。（印記）「商衍瀛印」

⑬　陳曾壽の題記

羅々山先生有云、危急時、跕得定方、是有用之學。此與陽明先生所云、千軍萬馬仍是寂天寞地、同一宗旨、無所謂朱陸異同也。清宮先生于姚江之學有師傳心得、出此屬題、敬識數語。

丙子（康德三年＝昭和一一年＝一九三六）三月、蒼虬陳曾壽。（印記）「陳曾壽印」

注

（1）安藤安子氏は茨城県水戸市備前町の耳鼻咽喉科医師に嫁した。

（2）「隨成隨校百篇詩　載筆六旬從老師　子夏再生應愧汝　贊助何徒止一詞
丙申秋自日光遊鹽原凡六旬、門人清宮宗親常隨從、每余詩成必謄寫、往々校正訛誤助老耄。及歸賦此以謝。　六十七齡中翁毅」（清宮宗親旧蔵の書幅による）。

（3）『二松学舎六十年史要』（一九三七年、財団法人二松学舎発行）二八頁。

（4）二松学舎大学附属図書館所蔵。『三島中洲と近代　其四―小特集　戦争と漢学』（二〇一六年、大学資料展示室運営委員会編、二松学舎大学図書館発行）一〇頁所収。二松学舎大学図書館 HP にて公開 https://www.nishogakusha-u.ac.jp/library/pdf/kankobutu.05.pdf。

(5) 清宮宗親旧蔵の書幅による。
(6) 金子新太郎は日清戦争前に渡清した陸軍軍人で、貴陽武備学堂への赴任は福島安正の推薦によるという。辛亥革命時に武昌に行き革命軍に参加したことでも知られる（『近代日中関係史人名辞典』二〇一〇年、東京堂出版）。
(7) 清宮の渡満時期については、二松学舎時代の旧知である久保雅友（一八六一～一九四二、号檜谷）が清宮の渡満を送る次の詩から分かる。清宮宗親旧蔵の書幅による。

四十星霜夢杳然　韓門同賞帝都春　山川海外君何壮　文字胸中吾尚貧
經術學朋交擇道　雲波煙嶠別傷神　友邦建国事多緒　珍重晁衡衣冕身
丙子二月念四日送清宮君還任満洲新京　同学弟雅友

(8) ご子孫の武熊聡氏によれば、清宮家の戸籍謄本には宗親が歿した日は三月二十七日となっており、位牌や墓誌も三月二十七日となっている。また、宗親の死亡届は長男宗賢が、四月二日に出しているとのことである。
(9) 『羅雪堂先生全集』続編四「貞松老人外集」巻三に、「三島中洲王文成公銅像記巻跋」所収。
(10) 底本は「一龕置于」に作り、文末に「置于二字應在龕字下」と附記するので、翻刻では正しい語順に入れ換えて記した。
(11) 『羅雪堂先生全集』続編四「貞松老人外集」巻三に、「又字号説巻跋」所収。
(12) 底本は「學沂舞雩」に作り、署名の次に「風字誤作舞字」と附記するので、翻刻では「舞」字を「風」字に改めた。